



# 6<sup>th</sup> *Translational Research News Letter*

No.14-1 March. 2010

**JAMTTC**  
<http://jamttc.umin.jp>

日本がん分子標的治療学会  
Japanese Association for Molecular Target Therapy of Cancer

事務局

〒135-8550 東京都江東区有明3-8-31 癌研究会癌化学療法センター内  
TEL : 03-3520-0111 内線 : 5417 FAX : 03-3570-0484

## 目 次

---

|  |    |
|--|----|
| 巻頭言.....                               | 1  |
| 第6回トランスレーショナルリサーチ(TR)ワークショップを終えて ..... | 2  |
| ワークショップ 新しいバイオマーカーを開発しよう .....         | 3  |
| シンポジウム Valid Biomarkerの有効利用 .....      | 5  |
| シンポジウム EGFR・RASの諸問題 .....              | 8  |
| 日本がん分子標的治療学会年間スケジュール (2010年) .....     | 9  |
| 日本がん分子標的治療学会 鶴尾隆賞の創設.....              | 10 |
| 歴代会長と学術集会開催記録 .....                    | 11 |
| 会員の推移.....                             | 11 |
| 第14回日本がん分子標的治療学会学術集会開催のお知らせ .....      | 12 |
| 日本がん分子標的治療学会 役員 .....                  | 14 |
| 入会申込書 (個人会員・学生会員).....                 | 17 |
| 入会申込書 (法人会員) .....                     | 19 |

## 巻頭言

理事長 曾根三郎

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

日本がん分子標的治療学会（JAMTTC）へ移行後、初めての事業として、「第6回トランスレーショナルリサーチ（TR）ワークショップ：がん分子標的治療効果予測のためのバイオマーカー開発」が近畿大学 西尾和人教授を実行委員長として平成22年1月22日に開催されました。今回、JAMTTCにふさわしい最新のトピックスが取り上げられ、本学会の特色である基礎、臨床を含む産学の会員200名以上が集い、先端的な発表と共に活発な討論がなされました。

JAMTTCが学会として大きく飛躍していくには、故鶴尾 隆博士（前理事長）が取り組んで来られた産官学の連携、トランスレーショナルリサーチの推進、国際的なグローバル化の推進を基本方針として継承していくことが大切と考えております。産学連携により、日本での新規がん分子標的薬の開発をいかに効率的に進めるか？ がん分子標的薬の創薬から育薬へ、また、適正使用のための標準化も視野に入れた臨床研究の取り組みなど、がん分子標的治療法を開発していくと共に、次世代を担う若手研究者に活躍する場を提供し、育成していくことも本学会の大きなミッションであると考えております。そういう観点から、TRワークショップの役割は大きく、研究会当時の流れを大切に、最先端のトピックスを取り上げ、学術的に交流する場を提供していくことは、学術集会とは異なった位置づけになると考えております。

今回のトピックス「がん分子標的治療効果予測のためのバイオマーカー開発」は、がんの個別化医療が急展開する中で最もホットな課題であり、国際的な競争の渦中にあります。PubMedを使って、2つのキーワード（cancer, marker）を入力しますと、2000年には5000編の論文数が、2009年になると50000編と10倍になっており、さらに、treatmentを入れた3つのキーワードで検索しますと25000編の論文が2009年に発表されております。この大きな変化は、2005年に米国FDAより提案されたDrug-Diagnostic Co-development構想を受ける形で新規抗悪性腫瘍薬の開発と同時にその効果や有害事象を予測するためのマーカー開発の必要性が企業側にも強く認識されてきたためと予想されます。個別化医療は難治がんに悩む患者さんにとって大きな福音であり、大きな展開が期待できる時代へと突入しています。

今回のワークショップにおいても、臨床サイド、研究サイド、企業サイド、そして規制当局サイドからも関係者が参集し、有効性や有害事象を予測するためのバイオマーカー開発の進捗状況、開発における問題点とその解決法などが提案され、国際的な展開の中で解決すべき問題点（方法論、人種差、研究資源確保、特許、検査費負担など）も明らかにされ、今後の課題が提案された点で大きな成果があったと思います。最後に、今回の企画運営にご尽力頂いた西尾先生並びにプログラム委員と座長の先生方、そして素晴らしい発表を頂いたスピーカーの先生方に厚く御礼申し上げます。

## お知らせ

日本がん分子標的治療学会 鶴尾隆賞を創設いたしました。

（10頁をご参照下さい）

## 第6回トランスレーショナルリサーチ(TR)ワークショップを終えて

実行委員長 西尾和人

近畿大学医学部

第6回トランスレーショナルリサーチワークショップの実行委員長を仰せつかりました西尾和人です。ご存じのように、当ワークショップは故鶴尾 隆先生が中心となり、文部科学省（がん特）、各種学会と共催して、我が国のがん治療分野におけるトランスレーショナルリサーチの推進を目的として続けられてきました。

第6回トランスレーショナルリサーチワークショップは日本がん分子標的治療研究会から学会に移行後はじめて行われました。平日にも拘らず200名の参加者を得て盛会のうちに終わることができました。誠にありがとうございました。また、本学会が単独主催するかたちで行われたことで、学会事務局には大変なご苦勞をおかけしました。

さて、同ワークショップのテーマは実行委員会の先生方のご協力のもと『がん分子標的治療予測のためのバイオマーカー開発』とし、分子標的治療薬の開発におけるバイオマーカーに焦点をあてました。ご多忙な中ご協力頂いた、座長、演者、実行委員会の先生方、事務局の方々にあつく御礼申し上げます。

もとより本学会は、官学民が一体となって、我が国のがん治療開発の推進を目指しています。第6回のワークショップでは製薬企業のみならず、体外診断薬関連企業、バイオ企業の方々にもご協力、参画を得ることができました。また、規制当局の先生方にもご協力を得ることができ、文字通り官学民が一体となった議論の輪が広まった感じが致しました。この場を借りてお礼申し上げます。

本ワークショップは一日間限りの開催でしたので、時間がタイトになり参加者にご不便をおかけしました。殊に午前中のワークショップ『新しいバイオマーカーを開発しよう』では、時間がタイトな中、最新のデータをご発表、ご議論頂きました。ランチョンセミナーにも多くの方々に参加頂きました。午後のシンポジウムにおきましては、臨床の場で用いられているバイオマーカーの動向について説明いただき、諸問題をあつくご議論頂きました。今後トランスレーショナルリサーチワークショップががん分子標的治療、がん治療の推進に貢献することを切に願っております。皆様方のご協力、ご助力を切にお願い致します。

## 新しいバイオマーカーを開発しよう

モデレーター 富田 章弘 (癌研・化療セ)

矢野 聖二 (金沢大・がん研)

バイオマーカー開発における技術的側面に光をあてた本セッションでは、有用な技術に関して、7つの先端的な演題の発表がなされた。「1. ICGCの活動：柴田龍弘 (国立がんセ)」では、高速シーケンス技術を用い高精度のがんゲノム異常 (変異) データの産出を目指す、国際コンソーシアムのプロジェクト概要と現状が紹介された。「2. 同時開発・創薬スクリーンの視点から：秋永士朗 (協和発酵キリン)」では、分子標的薬の開発におけるバイオマーカーの位置づけ・現状について、具体例を示しつつ紹介された。「3. バイオマーカー/抗体療法：小泉史明 (国立がんセ)」、「4. バイオマーカー/血管新生耐性・CEP：荒尾徳三 (近畿大医)」、「5. バイオマーカー/血管新生SNP：小山則行 (エーザイ)」、「6. バイオマーカー/糖鎖解析：植田幸嗣 (東大医科研)」、「7. バイオマーカー/イメージング：今村健志 (癌研)」の4つの演題では、分子標的薬のバイオマーカー探索や開発に応用可能な技術という観点から、最先端の情報が紹介された。

基礎的な視点からそれぞれの技術を眺めた場合、いずれもたいへん有望なものに思われた。バイオマーカー探索という観点からは、やはり、高速シーケンス技術によるゲノム異常の探索は魅力を感じた。技術的な進歩には非常にスピード感があり、50種のがんでそれぞれ500症例の全ゲノムシーケンスを遂行することは現実的な目標に見えてくる。膨大なデータからどの

ように有用な情報を取り出すかなどの情報解析技術の進歩も、ますます重要になってくるものと思われた。一方、糖鎖の異常に着目したバイオマーカー探索も興味深いものであった。糖鎖異常のある蛋白を選別しプロテオミクスの手法で解析することで、プロテオミクスによるバイオマーカー探索の感度の向上につながったとのことであった。分子標的薬の開発においては pharmacodynamic (PD) バイオマーカーは大変有用であるが、なかでも血液検体を用いたPDバイオマーカーの測定は、応用範囲も広く大変興味深い。今回の発表でも、キナーゼ阻害剤に対する新しいバイオマーカー測定法、抗体療法に対するADCC活性の迅速な測定法、またPDマーカーとしてのCEP (circulating endothelial progenitors) の可能性など、新しい技術の紹介が相次いだ。新しい技術という点では、非侵襲性のイメージング技術は大変興味深く、まさに百聞は一見にしかずというデータが紹介され、将来性の豊かさを感じた。以上のように、技術的な面から見た場合、大変興味深い演題ばかりであった。

臨床的な視点から求められるバイオマーカーとは、早期診断や治療の効果予測・副作用予測を正確にしかも簡便に測定できるものであろう。早期診断の観点からは新しい糖鎖抗原による膀胱癌診断の話題が提供されたが、様々な角度からさらに解析が進められ、根治手術可能な時点で診断に有用なバイオマーカーがみいだされるこ

とを期待したい。治療の効果予測や副作用予測については、測定方法の簡略化は近年のテクノロジーをもってすれば実現困難ではないと思われる、現時点ではいかに正確な予測ができるバイオマーカーをみいだすかがポイントである。現在臨床的に問題になっている血管新生阻害剤やマルチキナーゼ阻害剤についても、SNP解析による血管新生阻害剤の効果や副作用との関係をはじめとする興味深い話題がいくつか提供されたが、実用化に向けてまだ課題が多いように思われた。

分子標的薬の登場でがん治療に大きな変革がおこってきているが、重篤な副作用発生の問題や、高価な薬剤であるために医療経済に与える影響も危惧されている。バイオマーカーは、このような問題を解決するためにも必要不可欠であり、本学会から世界に誇れるバイオマーカーが誕生し育っていくことを期待したい。

## Valid Biomarkerの有効利用

モデレーター 西條 長宏 (近畿大・医)

佐々木康綱 (埼玉医科大)

バイオマーカーは臨床レベルで①使用することが必須とされる。②使用することを推奨する。③研究段階であり、実地医療に用いる状況ではない。ものの3種類に分類される(表1)。勿論研究段階にあるものであっても極めて重要でありトランスレーショナルリサーチのCOREを占める事には変わりはない。現在、実地医療を行う上で結果がValidateされていて治療を行う上で必須と考えられているものには、乳がんのHER-2発現・増巾(トラスツズマブ)、大腸がんのKRAS発現(セツキシマブ)などが代表的と考えられていた。近年の臨床試験の成果に基づき非小細胞がんのEGFR変異(EGFR-TKI)、大腸がんのKRAS変異(セツキシマブ)は更に確実なバイオマーカーと考えられている。また、胃癌のHER-2発現・増巾(トラスツズマブ)、卵巣がんのBRCA1&2の変異(PARP阻害剤)、EML-4/ALK translo-

cation(ALK阻害剤)等が最近注目を集めている。これら効果を予測するマーカーのうちBRCA1&2の変異はGerm line variationによるものであるが他は全てSomatic changeによる。使用することが推奨されるマーカーには今回のワークショップで発表されたUGT1A1\*28、\*6が代表的なマーカーとして知られている。UGT1A1は塩酸イリノテカンがカルボキシエステルアゼによって活性化型のSN-38に変換された後にグルクロン酸抱合を受け不活化する際に作用する酵素である。この酵素に遺伝子多型が存在し、promoter領域の\*28又は、Exon 1の\*6が存在すると酵素活性が低下しグルクロン酸抱合が妨げられ強い毒性を示すとされている。実際UGT1A1\*28あるいは\*6がホモ接合体で存在すると酵素活性はそれぞれ50%、32%に低下する。日本人では\*28がホモ接合体で存在する比率は約3-5%と欧米人に比べ

表1

| Classification of Biomarkers   |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>□ <b>Known Valid Biomarkers: Test required</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>— Accepted by scientific community at large to predict clinical outcome</li> <li>Herceptin (Her2), EGFR-TKI (EGFRmt), Erbitux (EGFR, KRASmt), PARP-I(BRCA1&amp;2 mt,def.), ALK-I(EML4-ALK)</li> </ul> </li> <li>□ <b>Probable Valid Biomarkers: Test recommended</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>— Appears to have predictive value but not yet replicated or widely accepted</li> <li>UGT1A1*28,*6, Cytidine deaminase*3</li> </ul> </li> <li>□ <b>Exploratory Biomarkers: (Valid, non Valid) Information only</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>— Supported by initial identification data</li> <li>Genomic &amp; Proteomic predictors (Single gene:ERCC1,RRM1,MSH2, TS, Exhaustive Analysis, Gene/Protein Signatures)</li> </ul> </li> </ul> |  |

低い。また、東洋人では\*6の多型の頻度が高いとされているもののホモ接合体で存在する確率は約1%である。一方、\*28及び、\*6がいずれもヘテロ接合体として共存する確率は5%で、この患者についても塩酸イリノテカンの毒性が高度に出現すると推定されている(表2)。即ち全体で見れば約10%の患者で塩酸イリノテカン投与によって強い毒性を経験する可能性がある。UGT1A1多型を持ちグルクロン酸抱合が阻害されていると推定されるUGT1A1\*6、あるいは、\*28のホモ接合体、ヘテロ接合体、及びそのいずれもヘテロ接合体で有する患者に対し、塩酸イリノテカンの至適投与量を決定するための第Ⅲ相試験が行われた。イリノテカン150mg/m<sup>2</sup>投与によって、Grade3/4の好中球減少が野生型の9.8%に対し、ヘテロ接合体を有する患者の18.8%、ホモ接合体及び\*6、\*28のいずれもヘテロ接合体で合わせ持っている患者の55.6%に認められた。推奨用量はヘテロ接合体を有する患者では150mg/m<sup>2</sup>と

決定されたが、ホモ接合体を有する患者では個人差が大きく、推奨用量を決定する事は困難であった。これらの結果に基づきイリノテカン添付文書にも2008年6月「UGT1A1の2つの遺伝子多型(UGT1A1\*6、\*28)についていずれかをホモ接合体又は、いずれもヘテロ接合体としてもつ患者ではUGT1A1のグルクロン酸抱合能力が低下し、SN38の代謝が遅延することにより重篤な副作用発現の可能性が高くなる」ことが報告されているため、十分注意すること、との文章が加えられている。また2008年11月1日より塩酸イリノテカン投与対象患者での投与量を判断する目的でUGT1A1のSNPをインベーター法で測定することが保健医療として承認されている。

遺伝子発現の網羅的解析に予後や治療効果を予測する因子を同定しようとする試みが数多く行われてきた。しかし、実際臨床に役立つものは殆どない。これは遺伝子発現という検出手法そのものが安定していないことにも基づいている。NCCN

表2

**Genotype prevalence**

|                    | *28 Wild<br>(6/6) | *28 Hetero<br>(6/7) | *28 Homo<br>(7/7) |
|--------------------|-------------------|---------------------|-------------------|
| *6 Wild<br>(-/-)   | 55%<br>(275)      | 10%<br>(50)         | 3%<br>(15)        |
| *6 Hetero<br>(-/+) | 24%<br>(120)      | 5%<br>(25)          | 2%<br>(10)        |
| *6 Homo<br>(+/+)   | 0.8%<br>(4)       | 0.2%<br>(1)         | 0.05%<br>(0)      |

Frequency in Japanese  
( ): Frequency in 500

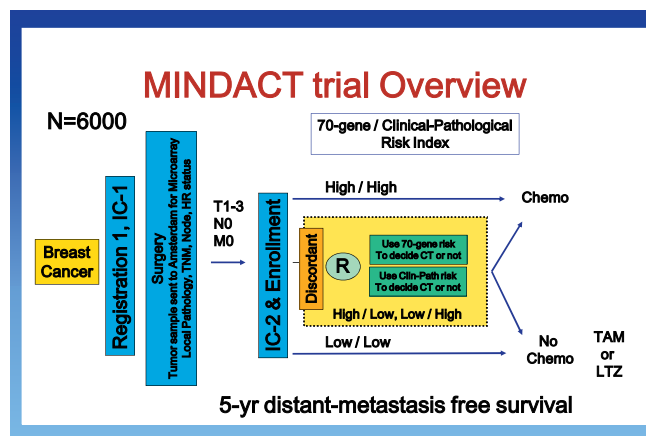


図1



ガイドラインにも記載のあるのは乳がんの Oncotype DXで、good signatureを示す群は poor signatureを示す群に比べ、PFSやOSが優れていることが示されている。またgood signatureを示す群では薬物療法の効果が得られないことも報告されOncotype DXおよびmammaprintは予後因子であるとともに治療効果の予測因子であることが報告されている。これらの結果をもとにMamma print、及び臨床病理学的リスクインデックスを用い、T1-3 NOMOで完全切除を受けた乳がん患者を①いずれもhigh risk、②いずれもlow risk、③いずれかがhigh riskの3群に分類し④群に化学療法、⑤群にはタモキシフェンか、レトロゾールのみを行い、⑥群に対しては化学療法投与の意義を比較試験で検討する研究（MIN-DACT trial）が始められている（図1）。II期大腸がんの再発予測についてもOncotype DXの妥当性が検討されている。対象となった4つの臨床試験に入った症例のパラフィン包埋標本から microdissectionを行い、48予後予測遺伝子及び、66の治療効果予測遺伝子をピックアップし、最終的に多変量解析で18遺伝子を同定した。これらの遺伝子群のマーカーとしての妥当性を490例についてQUASA Validation した結果独立した予後因子であることを証明している。しかし、多くの遺伝子発現の網羅的解析結果の妥当性については未だ確立されていないのが現状であり、乳がんのOncotype DXやMamma printのようにvalidateされたマーカーと認められるためにはクリアカットな結果が必須と思われる。

## EGFR・RASの諸問題

モデレーター 西尾 和人 (近畿大・医)

光富 徹哉 (愛知がんセ)

本シンポジウムでは、診断薬としてのEGFR、Rasの遺伝子変異測定について、基礎、臨床サイド、そして企業からの個々の視点での発表が行われた。基礎側からは、種々の遺伝子変異測定法について検出感度や簡便さなどをもとに、検出法の標準化について発表がなされた。臨床サイドからは診断薬の保険点数に関する問題提起がなされた。特にEGFRの検出法についての特許的な問題が取り上げられ、慣例化している横並びの保険点数は現状に即していないという一致した意見であった。これらの問題を改善していくためにも基礎研究者や臨床家は、審査機関であるPMDAに対してもっと発言すべきだという意見がなされた。総合討論では、診断薬開発企業の体外診断薬開発の流れについての紹介があった。今回のシンポジウムでは、バイオマーカーをひとつの診断薬として商品化されるまでの流れとして、基礎研究者から審査機関、販売企業、そして実際に用いる臨床医までが一同に会し、それぞれの立場から意見交換することができたという点で非常に意義深いものであったと思われる。

## 日本がん分子標的治療学会年間スケジュール (2010年)

---

|                  |  |
|------------------|--|
| 1月上旬             | 今年度会費請求書送付   |
| 1月22日 (金)        | 第6回TRワークショップ開催   |
| 2月28日 (日)        | 第14回学術集会 演題応募締切<br>研究奨励賞応募締切                               |
| 3月               | ニュースレターNo.13-1を全会員に送付                                      |
| 4月               | 理事立候補受付期間 (4月9日受付開始、5月7日締切)<br>評議員推薦受付期間 (4月9日受付開始、5月7日締切) |
| 5月               | 鶴尾隆賞推薦開始 (7月末日締切)  |
| 5月中旬             | 理事選挙   |
| 6月上旬             | 理事選挙開票   |
| 6月上旬             | 第14回学術集会 抄録集を全会員に送付  |
| 7月6日 (火)         | 第1回理事会、評議員会  |
| 7月6日 (火) -8日 (木) | 第14回学術集会開催<br>会場：タワーホール船堀 (東京都江戸川区)<br>会員総会は学術集会同会期中に開催    |
| 9月上旬             | ニュースレター No.14-2を全会員に送付                                     |
| 9月               | 第2回理事会 (日本癌学会学術集会開催時)                                      |
| 11月下旬            | 第15回学術集会の演題募集要項を全会員に送付                                     |

## 日本がん分子標的治療学会 鶴尾隆賞の創設

- \* 鶴尾隆賞の推薦を5月より開始致します。(7月末日締切)  
推薦書は当会ホームページよりダウンロードできます。  
(詳細はホームページ<http://jamttc.umin.jp/guide/tsuruo.html>をご参照下さい)

### 日本がん分子標的治療学会 鶴尾 隆賞の創設

#### 1. 学術賞の創設

鶴尾 隆博士(1943-2008)はがん分子標的治療研究において数多くの優れた業績をあげられると共に、がん分子標的治療研究会(1996)、続いて日本がん分子標的治療学会(2008)を主宰されてこの領域の研究振興に大きく貢献されました。日本がん分子標的治療学会は、鶴尾 隆博士のご功績を称え、がん分子標的治療研究の一層の推進を計るため、学術賞として「日本がん分子標的治療学会 鶴尾 隆賞」を創設する。

鶴尾 隆賞を運営するために、本学会は鶴尾 隆賞基金を設立する。基金は寄付金によって賄われる。

#### 2. 授賞対象者

がんの分子標的治療研究において顕著な業績をあげ、将来更なる研究の発展が期待される研究者を本学会の会員の中から毎年一名選んで授賞する。

#### 3. 鶴尾 隆賞の選考

##### (ア) 候補者の推薦

候補者資格は、継続して3年以上の会員歴を持つ日本がん分子標的治療学会の会員とする。

候補者の推薦は他薦とし、理事ならびに評議員は候補者一名を推薦できる。

##### (イ) 賞の選考

理事会が選考を行い、受賞者を決定する。

#### 4. 賞状・賞金

賞は賞状ならびに副賞とし、基金から支出する。

#### 5. 授賞式

(ア) 学術集会総会に続いて授賞式を行う。

(イ) 授賞式後、受賞講演を行う。

#### 6. 基金の会計

基金の会計は学会会計と独立に行い、年度毎に会計報告を行う。

#### 7. 本賞の設置

平成21年10月2日とする。

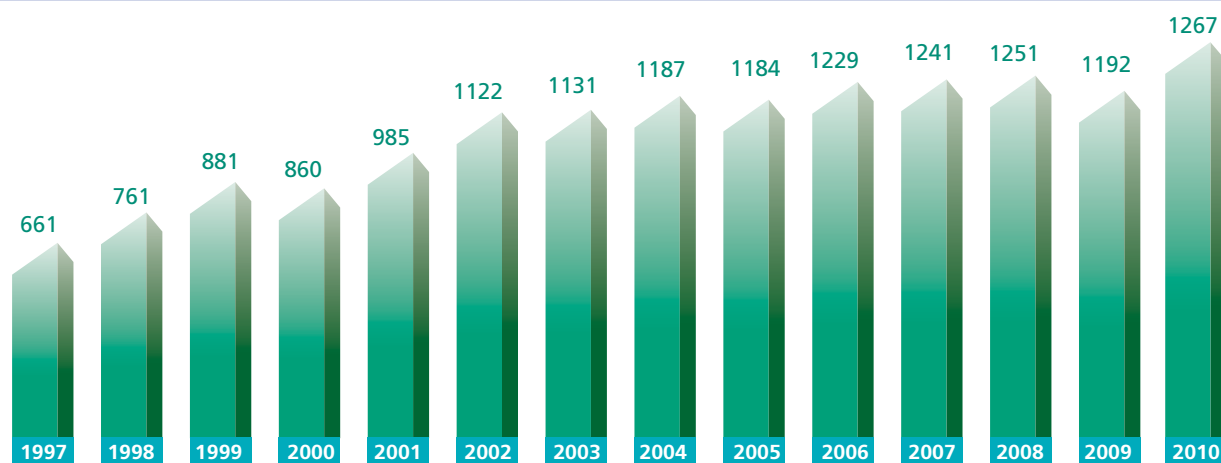
## 事務局からのお知らせ

- \* 理事立候補受付を4月から開始致します。(4月9日受付開始、5月7日締切)  
(詳細はホームページ<http://jamttc.umin.jp/oshirase/riji.html>をご参照下さい。)
- \* 評議員推薦受付(若干名)を4月から開始致します。(4月9日受付開始、5月7日締切)  
(詳細はホームページ<http://jamttc.umin.jp/oshirase/hyougi.html>をご参照下さい。)

## 歴代学術集会会長と学術集会開催記録

| 会 長                             | 学術集会 | 開催年   | 開催地 |
|---------------------------------|------|-------|-----|
| 1 鶴尾 隆(東京大学分子細胞生物学研究所)          | 第1回  | 1997年 | 東京  |
| 2 石塚 雅章(微生物化学研究会化学療法研究所)        | 第2回  | 1998年 | 東京  |
| 3 桑野 信彦(九州大学医学部)                | 第3回  | 1999年 | 福岡  |
| 4 上田 龍三(名古屋市立大学医学部)             | 第4回  | 2000年 | 名古屋 |
| 5 西條 長宏(国立がんセンター中央病院内科)         | 第5回  | 2001年 | 東京  |
| 6 新津洋司郎(札幌医科大学医学部)              | 第6回  | 2002年 | 札幌  |
| 7 上原 至雅(国立感染症研究所)               | 第7回  | 2003年 | 東京  |
| 8 秋山 伸一(鹿児島大学医学部)               | 第8回  | 2004年 | 鹿児島 |
| 9 平岡 真寛(京都大学医学研究科)              | 第9回  | 2005年 | 京都  |
| 10 矢守 隆夫(癌研癌化学療法センター)           | 第10回 | 2006年 | 東京  |
| 11 福岡 正博(近畿大学医学部堺病院長)           | 第11回 | 2007年 | 大阪  |
| 12 梅澤 一夫(慶應義塾大学理工学部応用化学科)       | 第12回 | 2008年 | 東京  |
| 13 曾根 三郎(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部) | 第13回 | 2009年 | 徳島  |
| 14 長田 裕之(理化学研究所基幹研究所)           | 第14回 | 2010年 | 東京  |

## 会員数の推移



### \* 入会のすすめ

がん分子標的治療研究は、がん治療領域において、これから一層重要な役割をもつと考えられます。

多くの研究者・企業の本学会へのご参加をお待ちしております。(入会申込書は19頁)

## 第14回日本がん分子標的治療学会学術集会 開催のお知らせ

|       |  |       |         |
|-------|--|-------|---------|
| 主 題   | ケミカルバイオロジーから臨床への橋渡し<br>ーベンチサイドからベッドサイドへー   |       |         |
| 会 期   | 2010年7月6日(火)~8日(木)   |       |         |
| 会 場   | タワーホール船堀 (学術集会およびミキサー)<br>〒134-0091 東京都江戸川区船堀4-1-1 (都営新宿線 船堀駅前)  |       |         |
| 内 容   | <b>【指定】シンポジウム</b><br>1. 創薬を目指したケミカルバイオロジー<br>2. 臓器別分子標的治療<br>Year in Review<br><b>【公募】ワークショップ/ポスターセッション (ポスターブリーフィング)</b><br>総会・研究奨励賞授賞式 |       |         |
| 参 加 費 | 学術集会   | 会 員   | 5,000円  |
|       |  | 学生会員  | 3,000円  |
|       |  | 非 会 員 | 10,000円 |
|       | ミキサー   |       | 2,000円  |

### スケジュール

| 7月6日(火) |    | 7月7日(水)                     |    | 7月8日(木)                   |
|---------|----|-----------------------------|----|---------------------------|
|         | 午前 | Year in Review<br>ワークショップ   | 午前 | Year in Review<br>ワークショップ |
|         |    | ランチョンセミナー                   |    | ランチョンセミナー                 |
| 基調講演    | 午後 | 総会<br>シンポジウム<br>ポスターブリーフィング | 午後 | ポスターセッション<br>シンポジウム       |
| ミキサー    |    |                             |    |                           |

お問い合わせ 第14回日本がん分子標的治療学会学術集会事務局  
 理化学研究所 基幹研究所  
 ケミカルバイオロジー研究基盤施設  
 〒351-0198 和光市広沢2-1  
 電話：048-467-9542 FAX：048-462-4669  
 担当：川谷 誠、二村友史  
 E-mail:jamttc14@umin.ac.jp

# 日本がん分子標的治療学会 第14回学術集会

ケミカルバイオロジーから臨床への橋渡し  
ベンチサイドからベッドサイドへ

## JAMTTC

学術集会会長 **長田 裕之**  
理化学研究所 基幹研究所  
ケミカルバイオロジー研究基盤施設

2010年  
**7月6日(火) - 8日(木)**

**タワーホール船堀**  
(都営地下鉄新宿線船堀駅前)

■ **シンポジウム**(指定)

創薬を目指したケミカルバイオロジー  
がん分子標的薬の耐性化メカニズム：  
基礎と臨床

■ **Year in Review**(指定)

■ **ワークショップ/ポスターセッション**(公募)

演題応募分野 ■ アポトーシス・オートファジー／遺伝子治療／がん遺伝子産物／血管新生・低酸素／  
ケミカルバイオロジー／細胞骨格／細胞周期／腫瘍免疫／増殖因子・サイトカイン／  
耐性因子・感受性因子／DNA複製・修復／テロメア・テロメラーゼ活性／転移・浸潤／転写因子／  
バイオマーカー／分化誘導／ホルモン・レセプター／臨床試験／その他

■ **演題応募締切**

平成22年(2010年) 2月28日(日) 正午  
詳細はホームページをご覧ください。  
<http://jamttc14.umin.jp>

事務局

第14回日本がん分子標的治療学会学術集会事務局：理化学研究所 基幹研究所 ケミカルバイオロジー研究基盤施設 担当：川谷 誠、二村友史  
〒351-0198 和光市広沢2-1 電話：048-467-9542 FAX：048-462-4669 E-mail:jamttc14@umin.ac.jp

# 日本がん分子標的治療学会 役員

## 理事長

曾根 三郎 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)

## 副理事長

新津 洋司郎 (札幌医科大学)

宮園 浩平 (東京大学大学院医学系研究科)

矢守 隆夫 ((財) 癌研究会癌化学療法センター)

## 理事

任期3年 (平成24年度学術集会終了日まで)

秋永 士郎 (協和発酵キリン株式会社開発本部)

上田 龍三 (名古屋市立大学大学院医学研究科)

上原 至雅 (岩手医科大学薬学部)

長田 裕之 (独立行政法人理化学研究所 基幹研究所)

新津洋司郎 (札幌医科大学)

宮園 浩平 (東京大学大学院医学系研究科)

山口 俊晴 ((財) 癌研究会有明病院)

任期2年 (平成23年度学術集会終了日まで)

石岡千加史 (東北大学加齢医学研究所)

今村 健志 ((財) 癌研究会 癌研究所)

大和 隆志 (イーザイ株式会社 創薬研究本部)

富田 章弘 ((財) 癌研究会癌化学療法センター)

西尾 和人 (近畿大学医学部)

畠 清彦 ((財) 癌研究会癌化学療法センター)

平岡 眞寛 (京都大学医学部附属病院)

任期1年 (平成22年度学術集会終了日まで)

宇津木照洋 (大鵬薬品工業株式会社 飯能研究センター)

梅澤 一夫 (慶應義塾大学理工学部)

西條 長宏 (近畿大学医学部腫瘍内科)

杉本 芳一 (慶應義塾大学 薬学部)

曾根 三郎 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)

藤原 康弘 (国立がんセンター中央病院)

矢守 隆夫 ((財) 癌研究会癌化学療法センター)

## 監事

渋谷 正史 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科)

橋本 祐一 (東京大学分子細胞生物学研究所)

## 評議員

青木 裕子 (中外製薬株式会社)

秋永 士郎 (協和発酵キリン株式会社開発本部)

秋山 伸一 (鹿児島大学大学院医歯学総合研究科)

秋山 徹 (東京大学分子細胞生物学研究所)

新井 裕幸 (グラクソ・スミスクライン株式会社)

安藤 俊夫 (埼玉医科大学総合医療センター)

石岡千加史 (東北大学加齢医学研究所)

石川 冬木 (京都大学 大学院生命科学研究所)

磯江 敏幸 (協和発酵キリン株式会社)

一條 秀憲 (東京大学大学院薬学系研究科)

今井 浩三 (札幌医科大学)

今村 健志 ((財) 癌研究会 癌研究所)

井本 正哉 (慶應義塾大学理工学部)

入村 達郎 (東京大学大学院薬学系研究科)

上田 博嗣 (アステラス製薬株式会社)

上田 龍三 (名古屋市立大学大学院医学研究科)

上原 至雅 (岩手医科大学薬学部)

薄井 紀子 (東京慈恵会医科大学附属第三病院)

宇津木照洋 (大鵬薬品工業株式会社 飯能研究センター)

梅澤 一夫 (慶應義塾大学理工学部)

及川 勉 (神奈川県立保健福祉大学大学院)

大塚 雅巳 (熊本大学大学院生命科学研究所)

大和 隆志 (イーザイ株式会社 創薬研究本部)

岡田 全司 (国立病院機構 近畿中央胸部疾患センター)

岡本 勇 (近畿大学医学部附属病院)

長田 裕之 (独立行政法人理化学研究所 基幹研究所)

小澤 敬也 (自治医科大学 内科学講座)

小野 眞弓 (九州大学大学院薬学研究院)

小俣 政男 (山梨県立中央病院)

掛谷 秀昭 (京都大学大学院薬学研究所)

片桐 豊雅 (徳島大学 疾患ゲノム研究センター)

加藤 淳二 (札幌医科大学)

金倉 讓 (大阪大学大学院医学系研究科)

川田 学 ((財) 微生物化学研究会  
微生物化学研究センター)

木村 晋也 (佐賀大学医学部医学科内科学講座)

高後 裕 (旭川医科大学内科学講座)

河野 公俊 (産業医科大学 医学部)

河野 通明 (長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科)

小平 浩 (株式会社ヤクルト本社)

小林 淳一 (北海道大学大学院薬学研究院)

近藤 科江 (京都大学医学研究科)

近藤 亨 (愛媛大学プロテオ医学研究センター)

済木 育夫 (富山大学 和漢医薬学総合研究所)



西條 長宏 (近畿大学医学部腫瘍内科)  
 酒井 敏行 (京都府立医科大学 大学院医学研究科)  
 阪口 薫雄 (熊本大学大学院医学薬学研究部)  
 佐々木 琢磨 (愛知学院大学)  
 佐々木 康綱 (埼玉医科大学 国際医療センター)  
 佐藤 昇志 (札幌医科大学医学部)  
 佐藤 靖史 (東北大学加齢医学研究所)  
 佐谷 秀行 (慶應義塾大学医学部)  
 珠玖 洋 (三重大学大学院医学系研究科)  
 柴田 浩行 (秋田大学 医学部)  
 澁谷 正史 (東京医科歯科大学)  
 島田 隆 (日本医科大学)  
 島田 安博 (国立がんセンター中央病院)  
 清水 史郎 (独立行政法人理化学研究所)  
 清水 信義 (慶應義塾大学・先導研)  
 JIANG, HAIYI (アストラゼネカ株式会社)  
 首藤 紘一 ((財)乙卯研究所)  
 杉本 芳一 (慶應義塾大学 薬学部)  
 杉山 雄一 (東京大学大学院薬学系研究科)  
 清木 元治 (東京大学医科学研究所)  
 清宮 啓之 ((財)癌研究会癌化学療法センター)  
 関戸 好孝 (愛知県がんセンター研究所)  
 瀬戸 加大 (愛知県がんセンター研究所)  
 曾根 三郎 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)  
 高井 義美 (神戸大学大学院医学研究科)  
 高子 徹 (第一三共株式会社 研究開発本部)  
 高橋 俊二 ((財)癌研究会有明病院 化学療法科)  
 田中 秀和 (塩野義製薬(株)創薬研究所)  
 谷口 維紹 (東京大学大学院医学系研究科)  
 田沼 靖一 (東京理科大学)  
 玉田 満 (日東電工株式会社)  
 田村 友秀 (国立がんセンター中央病院)  
 旦 慎吾 ((財)癌研究会癌化学療法センター)  
 照井 康仁 ((財)癌研究会癌化学療法センター)  
 戸井 雅和 (京都大学大学院 医学研究科)  
 富田 章弘 ((財)癌研究会癌化学療法センター)  
 豊田 実 (札幌医科大学 生化学講座)  
 内藤 幹彦 (国立医薬品食品衛生研究所)  
 直江 知樹 (名古屋大学大学院医学系研究科)  
 中川 和彦 (近畿大学医学部 腫瘍内科)  
 中村 篤 (サノフィ・アベンティス株式会社)  
 中村 秀男 (田辺三菱製薬株式会社 先端医療研究所)  
 中村 浩之 (学習院大学理学部)  
 中村 祐輔 (東京大学医科学研究所)  
 中森 正二 (国立病院機構 大阪医療センター)  
 長屋 秀明 (武田薬品工業株式会社)  
 南部 静洋 (日本イーライリリー株式会社)  
 新津洋司郎 (札幌医科大学)  
 西尾 和人 (近畿大学医学部)  
 西岡 安彦 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)  
 西河 芳樹 (日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社)  
 西谷 直之 (岩手医科大学薬学部)  
 西山 正彦 (埼玉医科大学国際医療センター)  
 野口 耕司 (慶應義塾大学薬学部)  
 橋本 順一 (ファイザー株式会社)  
 橋本 祐一 (東京大学分子細胞生物学研究所)  
 畠 清彦 ((財)癌研究会癌化学療法センター)  
 花岡 文雄 (学習院大学)  
 早川 洋一 (東京理科大学薬学部)  
 板東 勝啓 (バイエル薬品株式会社 オンコロジー事業部)  
 平岡 眞寛 (京都大学医学部附属病院)  
 福岡 正博 (近畿大学医学部堺病院)  
 藤田 直也 ((財)癌研究会癌化学療法センター)  
 藤原 康弘 (国立がんセンター中央病院)  
 伏谷 伸宏 (北海道大学大学院水産科学研究院)  
 堀江 重郎 (帝京大学医学部泌尿器)  
 本間 良夫 (島根大学医学部)  
 前川 平 (京都大学医学部附属病院)  
 前田 浩 (崇城大学薬学部)  
 前原 喜彦 (九州大学大学院)  
 馬島 哲夫 ((財)癌研究会癌化学療法センター)  
 松島 綱治 (東京大学医学部・大学院医学系研究科)  
 松田 彰 (北海道大学 大学院薬学研究院)  
 間野 博行 (自治医科大学)  
 水上 民夫 (長浜バイオ大学バイオサイエンス学部)  
 宮坂 昌之 (大阪大学大学院医学系研究科)  
 宮澤 恵二 (山梨大学・大学院医学工学総合研究部 (医学学域))  
 宮園 浩平 (東京大学大学院医学系研究科)  
 森 正樹 (大阪大学消化器外科)  
 森野 富夫 (日本化薬株式会社)  
 八木田 秀雄 (順天堂大学医学部)  
 矢口 信一 (全薬工業株式会社)  
 安川 正貴 (愛媛大学大学院医学系研究科)  
 矢野 聖二 (金沢大学がん研究所)  
 山口 俊晴 ((財)癌研究会有明病院)  
 山崎 達美 (中外製薬株式会社)  
 山添 康 (東北大学大学院薬学研究科)  
 山本 雅 (東京大学医科学研究所)  
 矢守 隆夫 ((財)癌研究会癌化学療法センター)  
 吉田 稔 (独立行政法人 理化学研究所 基幹研究所)  
 渡邊 俊樹 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)  
 綿矢 有佑 (岡山大学大)

名誉会員

石塚 雅章 (微化研)  
 加藤 隆一 (慶應義塾大学)  
 金丸 龍之介 (河原町病院 内科)  
 北川 知行 ((財)癌研究会癌研究所)  
 桑野 信彦 (九州大学 先端融合医療)  
 菅野 晴夫 ((財)癌研究会)  
 杉村 隆 (国立がんセンター)  
 高久 史磨 (自治医科大学)  
 高橋 利忠 (愛知県がんセンター)  
 竹内 富雄 ((財)微生物化学研究会)  
 寺田 雅昭 (国立がんセンター)  
 豊島 聰 (医薬品医療機器総合機構)  
 濱岡 利之 (四天王寺国際仏教大学)  
 村松 正實 (埼玉医科大学)



# 日本がん分子標的治療学会 個人会員・学生会員 入会申込書

申込年月日：            年            月            日

## 入会申込み要領

1. この申込書に必要事項をご記入及び該当する事項に○を付け、下記あて郵便もしくはFAXにてお送り下さい。  
記入漏れのある場合は再提出していただくこともございます。
2. 個人会員は当学会役員(理事、名誉会員、評議員)1名の、学生会員は指導教官の推薦文、署名、捺印が必要です。
3. 入会申込書受領後1週間前後で会費振込用紙をお送り致しますので、最寄りのゆうちょ銀行・郵便局よりお振込下さい。
4. 会費は個人会員5,000円、学生会員2,000円です。(本会の会計年度は1月～12月です。)

(入会申込書送付先) 日本がん分子標的治療学会 事務局  
〒135-8550 東京都江東区有明3-8-31 (財) 癌研究会癌化学療法センター内  
TEL: 03-3520-0111 (内線: 5417) FAX: 03-3570-0484

私は、「日本がん分子標的治療学会」に 個人会員  
学生会員 として参加致します。(いずれかに○)

|        |             |            |      |                   |
|--------|-------------|------------|------|-------------------|
|        | 姓           | 名          | 学位   | 生年月日              |
| 氏名     |             |            |      | 19    年    月    日 |
|        | Family Name | First Name | 専門分野 | 基礎・臨床の別           |
| 英文     |             |            |      | 基礎 ・ 臨床           |
| 所属機関   |             |            | TEL  |                   |
|        |             |            | FAX  |                   |
| 所属機関住所 | 〒           |            |      |                   |
|        |             | E-mail     |      |                   |

\*連絡先(書類送付先)として所属機関と異なる住所を希望する場合には以下に記入して下さい。

|     |     |        |  |  |
|-----|-----|--------|--|--|
| 住所  | 〒   |        |  |  |
| TEL | FAX | E-mail |  |  |

|     |    |  |  |  |
|-----|----|--|--|--|
| 推薦人 | 自署 |  |  |  |
|-----|----|--|--|--|

|     |  |  |  |  |
|-----|--|--|--|--|
| 推薦文 |  |  |  |  |
|-----|--|--|--|--|



# 日本がん分子標的治療学会 法人会員 入会申込書

申込年月日：            年            月            日

**入会申込み要領**

1. この申込書に必要事項をご記入いただき、下記あて郵便もしくはFAXにてお送り下さい。
2. 入会申込書受領後1週間前後で会費振込用紙をお送り致しますので、最寄りのゆうちょ銀行・郵便局よりお振込下さい。
3. 会費は200,000円です。（本会の会計年度は1月～12月です。）

（入会申込書送付先） 日本がん分子標的治療学会 事務局  
〒135-8550 東京都江東区有明3-8-31  
（財）癌研究会癌化学療法センター内  
TEL：03-3520-0111（内線：5417） FAX：03-3570-0484

当社は、「日本がん分子標的治療学会」に法人会員として参加致します。

|              |             |            |          |
|--------------|-------------|------------|----------|
| 貴社名          |             |            |          |
| 部 課 名        |             |            |          |
| 住 所 〒        |             | TEL        |          |
|              |             | FAX        |          |
|              |             | E-mail     |          |
| 代 表 者<br>氏 名 | 姓           | 名          | 学位       |
|              |             |            | 生年月日     |
|              |             |            | 19 年 月 日 |
| 英文表記         | Family Name | First Name | 専門分野     |
|              |             |            |          |

代表者を含めて20名以内の方のお名前をお届けください。（別紙）

住所、電話などが代表者と異なる場合には、別紙にリストを作成してください。

|    | 姓<br>Family Name | 名<br>First Name | 学位<br>E-mail Address | 専門分野 |
|----|------------------|-----------------|----------------------|------|
| 2  |                  |                 |                      |      |
| 3  |                  |                 |                      |      |
| 4  |                  |                 |                      |      |
| 5  |                  |                 |                      |      |
| 6  |                  |                 |                      |      |
| 7  |                  |                 |                      |      |
| 8  |                  |                 |                      |      |
| 9  |                  |                 |                      |      |
| 10 |                  |                 |                      |      |
| 11 |                  |                 |                      |      |
| 12 |                  |                 |                      |      |
| 13 |                  |                 |                      |      |
| 14 |                  |                 |                      |      |
| 15 |                  |                 |                      |      |
| 16 |                  |                 |                      |      |
| 17 |                  |                 |                      |      |
| 18 |                  |                 |                      |      |
| 19 |                  |                 |                      |      |
| 20 |                  |                 |                      |      |

代表者以外の方のお名前は後日お届けいただいても結構です。